

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12397

研究課題名(和文) 近世日本語における疑問表現の感動詞化

研究課題名(英文) Change from interrogative to interjection in Early Modern Japanese

研究代表者

深津 周太 (Fukatsu, Shuta)

静岡大学・教育学部・講師

研究者番号：50633723

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中近世日本語において疑問詞(疑問表現)が感動詞へと変化するプロセスを明らかにした。特に重視したのは、個々の変化がどのように起こったか、またその変化はなぜ起こったのか、という二点を説明づけることである。
ある語彙項目が文中において意味的・統語的機能を変化させるという現象を捉えたという意味で本研究は“日本語の文法変化”に関する研究であると言え、ここで得られたものは2000年代以降の日本語文法史研究の重要な位置を占める文法化研究の成果に匹敵すると思われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

傾向として疑問表現が感動詞化しやすいことについては夙に指摘がある。また、そうした日本語の機能変化については、文法化研究を筆頭に近年盛んに取り上げられている。しかし従来の研究は一般化を志向するものが多く、個別現象に対する実証的研究が十全になされてきたとは言いがたい。種々のケーススタディに取り組んだ本研究の成果は、「どのような機能変化があり得るか」という議論の発展に寄与するものである。
また、疑問表現や感動詞といった対人表現を対象とする本研究は、必然的に当時におけるコミュニケーションのあり方にアプローチすることとなり、その意味で近年発展の兆しを見せる歴史語用論とも密接な関わりを持つと言える。

研究成果の概要(英文)：In this study, We elucidated the process by which interrogative changes to interjection in Early Modern Japanese. Particular emphasis was placed on clarifying the details of the change and analyzing why it happened.

This study focuses on the phenomenon of semantic and syntactic changes in a word in a sentence. Therefore, we have obtained results on grammatical changes in Japanese through this research. In this sense, it can be said that this research has the same value as the study of grammarization.

研究分野：日本語学

キーワード：疑問表現 疑問詞 感動詞 呼びかけ 応答 歴史語用論 機能変化

1. 研究開始当初の背景

疑問表現の歴史を包括的に扱ったものとして山口堯二(1990)『日本語疑問表現通史』があるが、そこでは疑問表現が「感動詞への転化」を起こしやすいという事実が指摘されている。これは現代語において疑問表現由来の感動詞が多いことから頷けることであり、感動詞化、ひいては日本語の機能変化という観点から見ても重要な指摘である。ただしこの観点から見たとき、現象の一般化を志向する山口の論は個々の変化に対する説明が十全とは言えず、近年の文法史研究において求められる「どのように/なぜ」の解明には至っていない。

“疑問表現の感動詞化”という課題には、実態把握と一般化の両輪を以て接近することが必要となるが、山口(1990)以降、当該変化について扱った研究はほとんど見られず、結局その実態面は棚上げされたままとなっている。そこで本研究は【疑問表現の感動詞化は「どのように」起こるのか】という問いを核に据え、さらに発展的な問いとして【それは「なぜ」起こるのか】という点にもアプローチすることとした。

2. 研究の目的

文中において語彙項目が意味的・統語的機能を変化させるという意味で、本研究の対象である感動詞化は“日本語の機能変化”の一環として位置づけられる。感動詞化のさまざまな事例を分析し以下の点を明らかにすることで、日本語の機能変化にはどのようなプロセスがあり得るかという点についての成果を提供することが本研究の目的である。

ある語彙項目が感動詞化するための意味的・統語的条件はいかなるものか。

それらの語はいかにしてそのような条件下に置かれるようになるか。

3. 研究の方法

感動詞化とは単なる意味変化にとどまるものではなく、本来の統語的特徴を失い感動詞的特徴を獲得するという変化である。したがって感動詞化は、一定の統語的条件の下でそれが感動詞として構文中から取り出される段階を必要とすることとなるが、これまでの研究により、当変化には以下二つの典型的パターンがあることが明らかになっている。

ある構文に対して構造の読み替えが起こり、文中の語が感動詞として再分析される。

当該の語が一語文用法を定着させることを契機とする。

これらの見方を適用しつつ、具体事例に沿って仮説の修正を施しながら各現象にアプローチする方法を採った。

4. 研究成果

(1) 「なんと」の感動詞化

疑問表現「なんと(なにと)」が呼びかけ感動詞へと変化する現象の解明に取り組んだ。感動詞化の契機となったのは、多岐にわたる副詞「なんと」の用法のうち、「なにとそちは人を馬になす事をしつたといふが誠か」(狂言・虎明本)のような相手への問いかけを行う 問いかけ用法 である。このうち、「何とそれに付て一首あそバされぬか」(諸国落首咄)のように問いの形式をとりながら語用論的に行為指示・行為拘束(勧め・誘い・申し出)を行う表現が発達し、その語用論的意味が前面化したことで発話全体から疑問の意味が失われた結果、「なんと」が呼びかけ感動詞として再解釈されたと結論づけた。感動詞化については、まずは具体的事例の蓄積が重要であるという本研究の立場を体現する成果であったと言える。

(2) 意外性標識

疑問表現「なんと」は、(1)で取り上げた 問いかけ用法 のほかに 問い返し用法 と呼ぶべき用法を有する。これは「勸進帳をあそばされ候へ...」「なにと勸進帳を読めとや」(謡曲・安宅)のように、相手の発話に対する問い返し疑問に前置される「なんと」の用法を指す。この用法は驚きの感動詞への転成が見込まれるため、特に中世後期から近世初期における使用実態を確認することとした。その際、同文脈に現れる疑問表現「なに/なんじゃ」を併せて“意外性標識”として扱うこととし、各表現の用いられ方を比較する形で分析を行った。結果、主資料とした狂言台本軍には各表現の現れ方に差があり同時代の資料であっても一様に扱うことはできないということと、大きな流れとしては中世末期の「なんと」から近世初期の「なんじゃ」という

形で当該表現の重心が移っていくということが明らかになった。

研究計画の段階では感動詞化を主たる課題とし、「なに／なんじゃ」との比較は副次的なものと位置付けていたが、驚き・意外性を標示する感動詞への変化は単なる語史ではなく、当該表現全体の中に位置づける必要があると判断したためである。結果として、「なんと」が問い返しの文脈から後退する事実とそれが驚きの感動詞へと変化する事実をどのように考えるべきか、という新たな課題発見に結びつくこととなった。また、疑問表現全体の問題として重要なテーマへと派生したという意味でも、ただちに感動詞化の議論に向かわなかったことは正解であったと考える。

(3) 「なにが／なんの」

疑問表現「なにが／なんの」は中世以降、「賢ナラハ誅シテハナニカヨカラウ性体ナイ事ソ」(史記抄)、「公方カラヲカル、都尉カ何ノ其様ニハアラウソ」(史記抄)のように反語表現に利用される。本研究ではこれを“否定文脈における「何が／何の」”とみなし、その歴史的展開を継続的に扱った。特に大きな流れとして以下の二点を捉えた。

「何の」が近世以降に否定文脈において用法を拡張し勢力を増していく一方で、「何が」は発達を見せることなく元の反語用法にとどまる(両形式併存から「何の」優勢へ)。

「何の」は近世後期以降に否定応答文脈(発話頭)での使用に偏っていく。

まずは口頭発表の形で「なにが／なんの」の歴史全体を概観しつつ変化の大枠を描き、その後、特にの用法拡張において重要なプロセスと目される“副詞化”と、で見られた“応答表現化”に関して論の精緻化を図った。この成果についてはR4年度内の論文掲載を目指しており、期間内での最終的な報告が叶わなかったが、本テーマは様々な方向への発展が見込まれる。

また、(5)に後述する当初の研究計画にはなかった副詞に関する研究成果も、上記の副詞化の考察を通じて生まれた視点によるところが大きい。

(4) 「なに」との関連／「大した／大して」の成立と展開

否定応答の感動詞「なに」と共起しやすい「大した／大して」という連体連用のペアをなす語について、その成立過程と展開を明らかにした。主な展開は以下である。

先に成立していた「ちょっとした」という程度小を表す連体詞との形態的対応によって程度否定を表す「大した」が生じ、「大して」はそこから派生した。

もともと「大した」は語用論的制約により否定文脈に用いられにくかったが、その制約が解除されたことで肯定文脈でも多用されるようになる。その時期に「大した」から派生「大して」は逆に肯定用法を先行させ、後に否定用法を生むこととなる。

その後「大した／大して」はいずれも否定用法へと重心を移していき、特に「大して」は程度否定専用の形式となる。

本成果により、「なに」の問題を論じるうえできわめて重要となる程度否定という意味的特徴や、それらが使用される場合の語用論的条件など、「なに」の考察にあたって手掛かりとなりうる現象・使用条件などが明らかになった。前述(3)に示した議論の広がりもあり、「なに」そのものの語史については未報告のままとなったが、その分析に関する視野は拓けていると言える。さらに前述(2)で見たように、「なに」という表現は意外性標識としても機能している。このこととの関連も見据えながら今後の検討課題とする。

(5) その他

学界展望の執筆機会を得たことは本研究にとって大きな益となった。特に共時的研究・通時的な研究という観点から近年の研究成果を整理することは、自身の方法論を見つめ直すことにもつながった。同様に『日本語文法史キーワード事典』(2020、ひつじ書房)において本研究に直接かかわる「感動詞」の項目の執筆を担当した際には、「感動詞化」に重点を置いた記述を行い、改めてその重要性を主張することができた。

そのほか、疑問表現と密接に関わり合う“副詞”にまつわる研究成果として、副詞としての機能変化の問題(「ちょっと」:副詞 感動詞、「ちっと／そっと」:様態副詞 程度副詞)や、『日葡辞書』における様態副詞の扱いの問題なども扱った。さらに、程度副詞の歴史を包括的に扱った田和真紀子『日本語程度副詞体系の変遷 古代語から近代語へ』に対する書評を研究者自身の考え方を踏まえて行ったことも成果の一つに数えられる。これらは本研究の主テーマに照らせば周辺的なものではあるが、例えば(疑問表現を含む)副詞とその変化についてはその全体像の把握が肝要であり、成果報告にあたって行った調査・考察が本研究に与えた影響は少なくない。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

感動詞「コレ」の語形派生(コリヤ/コラ)とその機能分担に関する成果も、本研究の対象となる時期における感動詞に関わる論考という点で同様に意義を有する。その意味ではこれらも研究期間内における成果の一端と呼ぶことができよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 深津周太	4. 巻 3
2. 論文標題 狂言台本における意外性標識－疑問詞「何」に基づく－語文的表現の実態－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 静言論叢	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深津周太	4. 巻
2. 論文標題 近世における「なんと」の働きかけ用法 感動詞化の観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』、和泉書院	6. 最初と最後の頁 41-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深津周太	4. 巻
2. 論文標題 副詞「ちょっと」の感動詞化 行為指示文脈における用法を契機として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 高田博行・小野寺典子・青木博史編『歴史語用論の方法』、ひつじ書房	6. 最初と最後の頁 218-238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深津周太	4. 巻
2. 論文標題 上方・大阪語におけるコ系感動詞の歴史	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小林隆編『感性の方言学』	6. 最初と最後の頁 323-345
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深津周太	4. 巻 18巻2号
2. 論文標題 書評論文 田和真紀子著『日本語程度副詞体系の変遷 古代語から近代語へ』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 pp.160-pp.167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深津周太	4. 巻 96巻2号
2. 論文標題 「大した/大して」の成立と展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 34-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深津周太	4. 巻
2. 論文標題 『日葡辞書』におけるオノマトペの捉え方 ABAB型の掲出傾向から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部日本・日本語学研究論集	6. 最初と最後の頁 293-310
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深津周太	4. 巻 5
2. 論文標題 様態副詞の程度副詞化 「ちっと/そっと」の対照から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 静言論叢	6. 最初と最後の頁 111-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 深津周太
2. 発表標題 否定文脈に用いる「何が / 何の」の展開
3. 学会等名 日本語文法学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<ul style="list-style-type: none">・深津周太、学界展望 日本語の歴史的研究2019年7月～12月、花鳥社ホームページ、2020・深津周太、『日本語文法史キーワード事典』「感動詞」、ひつじ書房、2020
--

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------